

「子育て支援」は 子どもの立場に立ったうえで 「したい子育ての実現」であるべきです!



従来の待機児童対策だけでは変わらない

これまでの待機児童解消策は、保育所の増設や定員増、保育ママの導入など、「保育を受けられる子どもの数を増やす」ことに主眼をおいてきました。しかし、結果として一旦数を減らすことはできても、完全に解消することはできていません。



待機児童の捉え方を変え、多様な子育て支援を!

子育て家庭が、なぜ子どもを保育所に入れたいのか、その理由を分析し、「保育所に入れる」という選択肢以外の方法も選べる、多様な子育て支援策を提示して、待機児童の解消につなげるのが急務であると考えます。

こんな施策も検討できます!

現在、区立保育園の、園児一人あたりの保育に要する経費は平均月額約17万円(年額約210万円)ですが0歳児では月額約51万円(年額約615万円)です。

例えば、経済的な理由で0歳児を保育所に預けているけれども、可能ならば、**家庭で子育てをしたいと希望する世帯**に対し

- ・平均的な育児費(ミルクやおむつなど)月額約2万円
- ・30代女性の平均月収約25万円の7割の月額約18万円

合計子ども一人当たり月額約20万円程度の公的助成をした場合、保育所での保育経費に比べ、公費の支出は半分以下となり、同時に**希望する形での子育てが可能**になり、「待機児童」もひとり減ることになります。

子育て支援策は、子どもの立場に立ったものであり、かつ、親の生き方を支えるものであるべきです。親と子がともに過ごす時間は、意外と短いもの。一番大切なことは何か、もう一度、考えてみませんか。



練馬区議会議員 第五十九代議長 副幹事長
関口 かずお

議会運営委員会 委員

常任委員会 区民生活委員会 副委員長

特別委員会 総合・災害対策等特別委員会 委員

各種委員会 民生委員推薦会、土地開発公社評議員会

ご相談は… **関口かずお 事務所**

〒176-0021 練馬区貫井 3-53-8

Tel / Fax : 3998-1752 HP : <http://www.k-sekiguchi.jp/>

子育ては誰のものか



おかげさまで、区議会議員として、色々な場面でご挨拶をさせていただくが、その時々で私なりの、議員としてのおもいを伝えたり、問題提起をしたりする上での「言葉」がある。これまで大切にしてきた言葉のひとつが、「親」。親がなければ子はいない。今、自分がここにいるのは、母や父や、それより前の多くの世代が命を繋いできたからなのだ、いつもそれを肝に銘じている。だから、喫緊の課題としての、子どもの問題を考えるとき、それは同時に、もしかするともっと重い、親の問題なのではないかと、おもっている。

自分から七代遡ると祖先の数は二五四人いるのだそうだ。そして、さらに二十五歳で婚姻出産したとして約三十代遡ると、祖先の数は、二十億四千七百四十八万三千六百四十六人いるのだという。私を含め、あなたもまた、それだけの「親」がいるからの、「子」なのだ。そしてもちろん、その「親」の「子」が

また「親」になる、ということを繰り返し、人間の今は繋がっている。そうおもつと、

自分の命の重さを、一層感じる。自分に つながらる子や孫の命の重さも、改めて、おもつ。これからの日本を担うのは、私たちが繋ぐ命、なのだから。



子育てについては、人の生き方や世代によって、色々な考え方があるとおもつ。誤解を恐れずに言えば、私には、乳幼児を保育園に預けることには、抵抗感がある。なぜなら、「三つ子の魂百まで」というように、人間として、一番の基礎になるはずの時期、誰がどう接するかは、その子の人格や生き方に、一定の影響を及ぼすだろうからだ。しかし決して私は、保育園や保育所に預けている親を批判しているのではない。保育園で育つ子どもには、その環境によって身に付ける力があるからだ。幼稚園も、小学校に入ってからの子童クラブも、同じだとおもつ。子どもが日々を過ごし、育っていく、大切な場である。だからその場の充実が必要であると同時に、その場に子どもを任せきりにするのはなく、親が我が子を自らの手で育てるのだ、という意識を失わないことが求められるのではないか。

保育の現場、教育の現場に携わる人たちから最近耳にするのが、「待機児童をなくすこと」に主眼を置くあまり、子どもの生活の場としての環境が整えきれない制度の運営になっているとか、制度を利用する親が、子育てを、完全に「アウトソーシング」してしまう状況になっていることもあるという現状だ。子育ては、誰のものか。もう一度、考えなければならぬときが、きていると、おもつ。